

プラトンの教育思想 (3)

——「国家」を中心として——

福 井 守

プラトンの作品は、その全編がソクラテスの思想の影響下にあり、また著しく教育的色彩の強いことは周知のことであり、かつ、両者の思想の相違については、どこにその一線を画すべきかについても、種々の困難を伴うこともまた多くの識者の指摘するところである。しかしながら、プラトンの教育思想を知りうるうえにおいて、彼の「国家」がきわめてすぐれた著作であることは明白なことであり、あまりにもプラトンの教育思想がそこに展開されているといえよう。

元来、アテナイの教育は、政治的・社会的色彩の乏しい限られた素朴な一群の人々によってなされたが、ソピステース *σοφιστής*. の出現によって、彼らが自ら「智者」*σοφός*. を以て任じ、古くから存した「ソピステースの術」*ἡ σοφιστικὴ τέχνη*. を人々を教育することに転ずることによって¹⁾、素朴な教育の伝統は破れ、教育は政治的・社会的色彩を濃くするに至ったのである²⁾。このような時代において、ソクラテスは、教育を「肉体的にも精神的にも、美しい者における生産である」*τόκος ἐν καλῷ καὶ κατὰ τό σῶμά καὶ τὴν ψυχῆν*. とし、エロスに基づく共同の生産と定義づけ³⁾、当時の政治家をはばかりとくなく批判し、その故にこそ、あらゆる政治家から阻止され、刑死の途を歩んだともいえよう。

プラトンの著作中、プラトンのものとソクラテスのものとを区別しようとする場合、もっとも問題となるのは⁴⁾、代表的な著作「国家」である。それはこの著作が、成立年代からみて、ソクラテスのものとプラトンのものとの中間に位し、かつそれぞれの特色を内蔵しているという点に基づいている⁵⁾。

既に考察してきたように⁶⁾、彼の教育思想の基盤になっているのは、ソクラテスの教育観であるが、「国家」においては随所にその変化が見出されうる——このことは、同時に彼の教育思想の真面目が「国家」以降の著作において明白であるともいえよう。

I

プラトンの教育思想は、スパルタやアテナイを代表してみられる古典的ギリシア教育思想をうけて、それをさらに彼独自の理論によって体系化されたものといえるが、そのスパ

1) Protagoras, 316 d.

2) Diogenes Laertius, Hippias Major 等にあらわれる。

3) 拙稿「プラトンの教育思想 (2)」参照。東京女子体育大学紀要第2号, 1967.

4) J. Burnet はその典型といえる。

5) W. Lutoslawski: The Origin and Growth of Plato's Logic. では中期プラトン群にいれ、W. Windelband; Platon も後半期の作品としている。

6) 拙稿「プラトンの教育思想」(1) および (2) 東京女子体育大学紀要, 第1号および第2号。

ルタが、国家の統制に急で個人の個性を圧迫したことを批判し⁷⁾、全盛期のアテナイが個性の発揚を尊重しながら、国家自体の存立を危機に陥れたのは何故か⁸⁾。この個性の発揮と国家の存立とを密接な関係においてとらえようとしたところに、「国家」のねらいがあったといえよう。

およそ人間は、「自分自身の事をすべき」*τό ἑαυτὸν πράττειν*. であって数多くのことをなすうるものでもなく、なすべきでもない。各人はその才能資質に応じた個性を発揮して一つのことをなせばよく、*εἰς ἓν κατὰ φύσιν*. そのことが同時に国家 *τὰ πολιτικά*. の益となる⁹⁾。にもかかわらず、スパルタとアテナイに不満足なところがあるとすれば、個人と国家とは如何なる関係にあるのか。ここに彼の理想国家の維持と充実とにふさわしい人間は、どのように教育されなければならないかの問題が生じてくる。

プラトンの「国家」の中心課題は、この問題にこたえて、正義 *δικαιοσύνη*. を探究することに存する。周知のように、プラトンの「国家」における国家組織は、正義の理念に基づく三分法、すなわち、支配階級 *ἄρχοντες*. 軍人階級 *στρατιώται*. 生産階級 *δημιουργοί*. の三階級が、各々その本分をつくして調和するところに国家の正義が成立する。したがって当然の結果として、理想国家にふさわしい人間の陶冶理想は、具体的にはこの三階級の別に応じてそれぞれ異なってくる。すなわち、各人は理性 *λογιστικόν*. と気概 *θυμοειδές* と欲望 *ἐπιθυμητικόν*. との三機能をもっているながら、それぞれの素質に応じて成立している。支配階級の陶冶理想は、気概を指揮して欲望を統べるところの理性、すなわち智 *σοφία*. の実現であり、軍人階級の陶冶理想は、理性の命に従って欲望を制する気概、すなわち勇氣 *ἀνδρεία*. の実現であり、生産階級の陶冶理想は、理性の命に従い、気概の統制に服する欲望、すなわち節制 *σωφροσύνη*. の実現ということになる。この三徳の調和 *ἁρμονία*. が個人における正義であり、同時に国家組織における正義であって、陶冶理想もこれにほかならないのである¹⁰⁾。

この陶冶理想の区分でも明らかなように、生産階級の陶冶理想は、自分の職分を上層の二階級の職分に服従させることにある。軍人階級の陶冶理想は、その職分を上層の支配階級の職分に服従させながら、その下層の階級——生産階級——を支配するところであり、一方支配階級は、軍人階級の中から、教育の過程を通して選抜されてくる階級とされているから、プラトンの「国家」における教育活動は、支配階級と被支配階級の二大別において考えられたといえよう¹¹⁾。

各人は素質に応じて各階級に分属することが国家成立の必須条件であるが、人は何故にそれぞれ異なった素質をもって生れ、異なる階級に属するようになっているのか。この点については、プラトンはまたも神話をもって語っているが¹²⁾、金、銀、鉄および銅が同じく

7) *Nomoi*, I.

8) *ibid.*, III.

9) *Politeia*, 270 c.

10) *ibid.*, III. IV.

11) 被支配階級の教育については述べられていないが、*Leges* では *περὶ* という語がしばしばでてくる。これは教育と違った意味において一般大衆——生産階級——に対する教育法といえる。*περὶ* の一方法として、いわゆる *γενναίου ψεύδος* は、医者が患者を欺く場合になぞらえ、この点はプラトンの著作の随所にみられる。(*Politeia*, 389a, 414c, 459c. *Leges*, 663e)

12) *Politeia*, 414d~415a.

大地から創り出された同胞として祖国を愛すべきであるし、その本性に応じてその分を守るべきであるとしている。

II

プラトンの「国家」の中心課題は、前述のように正しい個人と正しい国家とはどのような関係において求められるか、という問題に答えて正義を探究することにある。正義とはどういうことか。しかも完全に正しい人が存在するのかどうか。もしあるとすれば、それはどのようなものか。同様にしてまた不正なる人を求めて、その幸、不幸について検討し、しかもわれわれの中で彼らに最も似ている者が、彼らの運命に最も似た運命を持つであろうことを証明するのが全篇のねらいである¹³⁾。正一幸、不正一不幸を現実生活の中に見出し、それに照して判断するための理想的人間像を求めるのが「国家」の主題であり、その正・不正を判断するために支配者がどのようにして教育されなければならないかという教育論がそこに展開されてくる。理想国家を支配すべき哲人の生い立ちを、その第一歩たる優生学的見地から最高の哲学的教養に至るまでを念入り詳細に考察し、それを認識論や形而上学によって基礎づけたものであり、それはまさしく支配階級のための教育課程論といえよう。

青少年時代における彼らの学習や哲学のすべては彼らの幼さにふさわしいものでなければならない¹⁴⁾、というプラトンの考えは、既に人間の誕生前から始まる。すなわち「優良な種族を生ませるための工夫」*μηχανὴ τῆς εὐγενείας* が考えられ、この工夫こそが支配者の任務であると説き、結婚年令も男子は30才から55才まで、女子は20才から40才までの間に限定し、優良な男女の結合を多くし、優良なる生児のみを育てるという古典期のスパルタを模範としている¹⁵⁾。女も子どもも、すべての教育も共有であり、仕事も住居も共有であると主張されたが¹⁶⁾、その理由は、国家の平和、国民の団結を強めるためにも、国民がその快苦を共にしようとしたためである¹⁷⁾。

誕生から17才頃までは、音楽と体育が重視される。それも一部の人が考えているように音楽は魂の訓練のため、体育は身体の訓練のためというのでもなく、この二つがそれぞれ魂と身体にそれぞれ役立つことは二の次として、魂の二つの要素、すなわち、元気なものと愛智的なものが適度に調和されるためであると結論する¹⁸⁾。さらにこの時期には、諸科学の初歩も授けられるが、それは「強制的ではなく遊戯的なものとして」*μὴ βιά ἀλλὰ παίζοντα*。¹⁹⁾「非体系的に」*τὰ χύδην μαθήματα*。その自由な学習の中に各々の個性の育成が考えられている²⁰⁾。

17才から20才までは、体育の特修期間が設けられる。元来、体育は生涯を通じて継続されるが、この期間は他の教科を排して専修させ、後年の困難な数科に堪えうる心身を養うのである²¹⁾。この間に労働や軍事にすぐれた成績を示す者が登録され、成績の劣るもの

13) *ibid.*, 472c.

14) *ibid.*, 498b.

15) *ibid.*, 458d~460e.

16) *ibid.*, 464d. e

17) この考えは *Nomoi*, VI. では若干緩和されている。

18) *Politeia*, 410b.~411c.

19) *ibid.*, 537a.

20) *ibid.*, 537c.

21) *ibid.*, 537b.

は被支配階級に属すべきものとして残される。

20 才に達して選抜された青年達に対して、ようやく本来の知的教育がはじめられる。すなわち、後の哲学の予備教科 *προπαιδεία*。としての算術・幾何・天文・音楽理論を系統的に学ばしめる。これまで非体系的に教えられた諸科学について、その本質および相互関係が究められ、しかも彼らの本性が弁証的 *διαλεκτικός*。であるか否かの最大の試練でもあり²²⁾、真理にたすけられて存在者そのものにむかうことができる者のみが支配階級として選抜される。

30 才から 35 才までは専ら弁証法を学ばしめる。それは感覚的なものを離れて、哲学的に事物の本質を取扱うことである。プラトンは「弁証的進行」*ἡ διαλεκτικὴ πορεία*。²³⁾ と「弁証的研究」*ἡ διαλεκτικὴ μέθοδος*。²⁴⁾ をあげ、それを「弁証法」*ἡ διαλεκτική*。と名づけて、教育課程の頂点に位させている。

35 才から 50 才までは、再び洞窟²⁵⁾ に入る時期である。いいかえれば、軍事の指揮にあたり、政治をつかさどり豊かな経験を獲得する時期である。しかも 50 才以後は、行為においても、知識においても、弁証法の最高対象である善のアイデアを研究し、順番がくれば政治に努力し、義務として国のために支配者となり、後進の教育に当る。このようにして、自分自身に代わって彼らを国の守護者として残し、去っては「浄福者の島」*μακάρων νῆσος*。に住まなくてはならないと説いている²⁶⁾。

III

以上が「国家」における支配階級の教育段階の大要であるが、この教育課程は同時にエロスの発展段階であると共にまた認識の深化の段階でもある。プラトンは認識の深化の過程を、① 想像 *εἰκασία*。をもって事物の映像 *εἰκόνες*。を認識する段階、② 知覚 *πίστις*。をもって現実の事物を認識する段階、③ 悟性 *διάνοια*。をもって諸科学の理論を認識する段階、④ 理性 *νοῆσις*。または真智 *ἐπιστήμη*。をもって諸種のアイデアおよび善のアイデアを認識する段階にわけているが、前述の音楽および体育の基礎的陶冶の段階は①および②の想像的、知覚的認識の段階であり、諸科学の学習段階は③の悟性的認識の段階に相当し、最後に狭義の哲学の段階は、④の理性がアイデアを認識する段階に相当している²⁷⁾。

これらをもて容易に気づかれる顕著な特色は、教育が理想国家の維持と充実とを目的として、きわめて論理的に述べられているという点である。ソクラテス的教育思想にも勿論国家の有為なる一員として陶冶すべきことが含まれているが、これを国家組織の見地から系統的・論理的に把握したのは、プラトンの輝やける功績と云ってよい。彼の教育思想の大部分が、「国家」および「法律」の中に見出されるのもこの事情によるのである。

さらにプラトンは、幼時の可陶性を説いて、その時期には、われわれが欲するままの型

22) *ibid.*, 537c.

23) *ibid.*, 532a.

24) *ibid.*, 533c.

25) *ibid.*, 514~518. 「洞窟」*απήλαιον*。の譬喩は、教育ある者と教育なき者との性質を説明するために用いられたものであるが、その真意は、子弟に内在する価値可能性を認め、文化的思慕を喚起し、その実現を助成することを教育の本質と考えているのである。

26) *ibid.*, 540a~c.

27) 石山脩平：西洋教育史 第1巻 ギリシア篇, p. 531.

式を幼児の心に刻み得ると言い、教育は特に初期が重要であることを指摘している²⁸⁾。このことは教育の初期における優生的見地と無縁でなく、理想国実現と密接な関連を有している。すなわち、理想国家の最大善を擁護し、最大悪を排除するために、すぐれた男女の結合、くじを用いる結婚の質量の制限、弱少な嬰兒殺しなどが述べられている²⁹⁾。

教育が国家的見地と個人的見地との不離の関係において取り扱われていることは既述の通りであるが、正しい個人と正しい国家の方式を究明しようとしたこの著作“Πολιτεία”をどのように解したらよいであろうか。プラトンによれば、すべての国家は物質的なものから成立つのではなく、その国の人々の性格から成り立つ。それゆえに、個人の精神はそれと同じものを、より大きな国家の姿において現わすのである。すなわち、理性の支配する「貴族主義的」ἀριστοκρατικός. な人々によって成り立つ国家は哲人支配の「貴族政治」ἀριστοκρατία. の形を現わし、欲望の支配する「民主的」δημοκρατικός. な人々は「民主政治」δημοκρατία. の国を成立させる。このことは、国家の成員としての個人の自らの中の国家精神構造が、国家の組織形態に対応するとみるのである。プラトンが個人の精神構造を彼自らの中の国家といい³⁰⁾、正義には個人的なものと同様に国家的なものがあると説いているのもこの理由からである³¹⁾。このようにして理想的国家組織は、理想的個人精神と結合対応していることを述べているのである。しかも理想国における教育の構想は、対象を小さな形でみるのではなく、まず絶対的と思われる理想を先に立てて、それと同じ姿を小さな形において見ようとするわけである。

「国家」の中に流れるプラトンの教育思想をながめてくると、彼の理想国における教育の性格が、理想国家の維持充実という目的に強く支配されていることがわかり、それに集中していることがうかがわれる。しかも最高善に基づく理想国家のためには、その理想をつねに見失うことのない者が選ばれなくてはならず、そこに哲学の重要性が指摘されるとともに、その選抜のための段階的教育法が強調されてくるのである。

プラトンの教育思想が、哲学的な基礎づけをもっていることはいままでの議論でもないが、それと共にそれが弁証的性格を持っていることに注目しなくてはならない。彼のいう「弁証的進行」ἡ διαλεκτικὴ πορεία. は、対話することによって、イデアをみることを企て、美そのものを理性をもって把握するまでは退かぬ進行を指すが³²⁾、一個の感覚的現象より、多くの同種の感覚的現象に眼を拓げ、それをさらに一個の科学的認識によって統一し、その上哲学的認識によって統一するのが、プラトンの意図するところである。このような弁証的過程の最高段階を「弁証法」ἡ διαλεκτική. と名づけたが、そこではより多く物的な対象から、より少ない物的な対象へ進むことと、多を一に統一することを特長とする「綜合」συναγωγή. が考えられ、低次の段階がすてられて高次の段階が求められるのではなく、低次の段階は、高次の段階によって基礎づけられ、正しい位置と秩序とが与えられるものでなければならない。

生産階級は生産階級であるがゆえに他の階級ではないが、同時にそれは他の階級でない

28) *ibid.*, 377b.

29) *ibid.*, 459d~461c.

30) *ibid.*, 591e.

31) *ibid.*, 368e.

32) *ibid.*, 532a.

ことによって他の階級から制約され、その限りにおいて他の階級の作用を自らに受けているのである。生産階級が支配階級の統治下であり、軍人階級の命に服するということは、他の階級においても同様のことがいえる。それ故にこそ、選ばれた支配階級といえども、彼自身に関しては厳しい犠牲を強いている。国民がその個性を発揮しながらしかも互いに牽制しあい自己を抑制することが、プラトンの国家の理想であり、同時に個人の理想でもある。彼はこれを正義と名付け、その本質を各階級、各機能の調和に求めた。これこそ弁証法の原理であり、「国家」の教育思想を貫く大綱といえよう。